

氏名	田端 真弓
学位の種類	博士（体育学）
学位記番号	第 2 4 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位授与年月日	平成 2 4 年 3 月 2 3 日
学位論文題目	幕末から明治初頭の大村藩における武術振興と藩校改革に関する研究
論文審査委員	主査 山田 理恵 副査 川西 正志 副査 金久 博昭

論 文 概 要

幕末大村藩第 12 代藩主大村純熙は、諸藩の情勢を受けて、元治元年藩士に対して勤王の意向を示した。足輕が主体であった薩摩、長州の二藩とは異なり、小藩であった大村藩の勤王派は、明治期の神道無念流剣術家として知られる渡邊昇など藩内の上級武士たちを中心としていた。勤王派の動向が激化する前の安定した政局のなかで、純熙は、外圧に対する対応策を打ち出すことを目的とした「安政改革」を行った。改革の一つに神道無念流剣術の採用と同流剣術家斎藤歆之助の招聘がみられる。純熙は元治元年に藩論を勤王にしたのち、同年 11 月には、藩校五教館の改革を実施した。以降、藩校が廃校となり小学校が設立されるのは明治 4 年のことである。それぞれの事象についてはこれまでにすでに明らかにされている。しかし、神道無念流剣術採用され、歆之助が大村藩へと招聘された経緯に関する詳細な検討はなされておらず、また、渡邊昇によって起草された藩校改革について、武術や身体訓練に着目した研究はなされてこなかった。しかしながら、明治期に剣術家のみならず官僚としても活躍したことで知られる渡邊昇や同流剣術家柴江運八郎は大村藩の藩校における武術教育を通して育成されたことから、大村藩における武術に着目し、明らかにする必要がある。

そこで本研究は、次の三点について明らかにすることを目的とした。まず、1) 幕末大村藩が藩政改革の一端として神道無念流剣術家・斎藤歆之助を招聘し、藩内の剣術流派を従来のものから神道無念流へと改変した経緯について、2) 元治元年の藩校改革が生じた経過と歴史的背景、改革の内容について、そしてこれらを受けて、3) 幕末から明治初頭の武術、身体訓練、とりわけ、西洋式軍事訓練がすでに導入されている時期の武術の位置づけについて検討した。

上記三点について、次のような結果が得られた。

1) 大村家文書『九葉實録補欠草稿式』および斎藤家文書『脩行中諸藩芳名録』を主たる史料として、斎藤歆之助招聘の経緯と剣術流派改変の経過について明らかにした。歆之助の兄、新太郎の廻国修行における大村藩の訪問は、同藩剣術流派改変のターニングポイントになったとみられる。その後、大村藩士の練兵館入門、藩主による試合の謁見などを経て、嘉永 7 年 5 月に歆之助が招聘された。彼の招聘後、藩は彼を剣術師範役に任命すると、神道無念流剣術の稽古を推進し、さらに藩主流の剣術流派を神道無念流へと改変した。江戸練兵館から地方へ剣術家を招聘したという点で、他藩にみられない特異な事例であったといえる。

2) 大村家文書『両館御改革』『九葉實録』および渡辺家史料『渡邊昇自傳』を主たる史料として用い、元治元年の藩校改革は改革派同盟と言路洞開の令を背景に、改革派同盟の中心人物であった昇によって起草されたこと、この改革の根底には藩士や庶民の学問と武術に対する意欲を高め、大村藩全体を勤王の方向に導こうとする意識があり、文武の兼修と剣、槍、馬術の稽古が重視されたことを

明らかにした。

3)『九葉實録』を主たる史料として、西洋式軍事訓練導入過程を明らかにし、剣術流派改変および藩校改革期における武術の位置づけを考察した。大村藩は西洋式軍事訓練の習得を画策する一方で、藩の剣術を神道無念流へ改変させ、藩主らは和銃よりも洋式の銃が実用的であることを理解しながらも、藩校改革においてあくまで剣・槍・馬術を奨励した。そして、慶応期、藩主は西洋式軍事訓練を命じつつも新太郎来藩以前から剣術稽古に打ち込んでいた者に一定の評価を与えた。西洋式軍事訓練導入の時勢にあっても、大村藩の武術は一定の位置にあり、同時並行で改革され維持されたのである。

以上のように、幕末大村藩の剣術流派改変の経緯、藩校改革における文武兼修と武術の修学、西洋式軍事訓練導入の時勢における武術の重視は、特異な事例であり、明治期に活躍する渡辺昇らは同藩の藩校における武術教育を通して育成されたといえる。

論文審査の要旨

本論文は、幕末から明治初頭にかけての大村藩(長崎県)における剣術流派の改変と武術振興の過程、藩校改革の経緯と意義について、大村家文書や大村藩関係文書等の貴重な一次史料を用いて明らかにしたものである。

同論文では、大村藩の藩校改革において、藩士や庶民に文武の兼修と武術の稽古が重視されたこと、同藩では西洋式軍事訓練を導入しながらも武術の地位も確立させていたことなどが解明され、また剣術流派改変と藩校改革による文武の兼修および武術の振興が、小藩でありながら明治期の政界・教育界に多大な足跡をのこした渡辺昇らを輩出する基盤となったことが考察された。本論文は、従来の日本近世・近代体育史に未見の独創的な研究であると位置づけられる。またその成果は、武術の教材化と近代学校教育について考察するうえでも意義があるといえる。

以上のような点から、本論文は博士の学位を授与するに十分な論文であると判定された。